

梵文『法華經』「法師品」にみられる二、三 の言語的特徴

笠 松 直

1. 序

梵文『法華經』には数多くの興味深い言語的特徴が看取される。第X章「法師品」においても同様である。そうした現象の存在自体は、既に先学が多くを指摘してきた¹。特異な語形を取り上げて論じ、『法華經』の、そしてその思想の原像に迫ろうとする試みも多々なされてきた。

そうした特徴的な、あるいは異例な語形も語法も一もし純然たる誤写などでないのなら一本来、一定の文法的な手順に従って形成されたはずである。そうでなければその文は意味をなすまい。発話は、文法が共有されている間柄であればこそ成立する。ところで、文法は時を経ると、あるいは場所を隔てると変化を来し得るものでもある。ならば語形・語法の遷移は、時代や地方の推移を反映するものと期待されよう。

本稿においては第X章「法師品」に見られる特色的な語形を数点、取り上げ、概説する。併せて他の諸章に見られる並行現象・同語根による派生形にも言及し、以て『法華經』成立史解明のための一視座を提示することとしたい。

2. *ā-khyā* と *ā-cakṣ*

Kern-Nanjio 校訂本²、第X章のある一節で、*ā-khyā* と *ā-cakṣ* との過去分詞形が並列して現れる：

- 1 殊に TODA [1981] の Introduction と Index とは、扱われるべき語形を網羅しており、極めて示唆に富む。
- 2 以下、本稿で主に利用するテキストは：Kern-Nanjio 校訂本 (KN)；荻原・土田校訂本 (WT)；Cambridge 蔵本 (Add.1684, “C5”, 書写年代ネパール暦185〔西暦1064/1065〕年)；大英図書館蔵本 (Or.2204, KN 本脚注に言う B 写本, 書写年代11-13世紀)；コルカタ本 (インド・コルカタ・アジア協会蔵梵文法華經紙写本 No.4079, 書写年代ネパール暦800/801〔西暦1680/1681〕年)；東大蔵本 (No.414, “T 8”, 書写年代17-18世紀)。Gilgit 伝本 (7世紀以降と見做される) は Watanabe 校訂本を、Kashgar 伝本 (9-10世紀と言われる) は Toda 校訂本を用いる。

KN X: 230,7-9 *tathāgatasyāpy etad bhaiṣajyarāja *ādhyātmika-dharma-
rahasyam ... anācakṣita-pūrvam. anākhyātām idam sthānam.*

如来にとっても、これは、薬王よ、内心の法の秘密である。… [この見解は] かつて語られたことのないものである。これは、語られたことのない立場である」 (= WT 200,26-201, 2)。

これらの二語根は、補完現象を起こす動詞であって、標準的には *ā-khyā* が過去分詞形を担う (*ākhyāta*-)。非標準的な *ācakṣita*- と同時に用いられたとは考え難い。この問題とそれが示唆する『法華経』成立史に関わる事情については別稿で論じたが³、要約すれば以下の如くである：校訂本が両語形を並列するのは、ネパール系写本の読み（例えば東大蔵本59a7 *anākhyāta-pūrvam idam sthānam*）とカシュガル写本の読み（Kashg 219a4 *idam sthānam anācakṣita-pūrvam*）とを折衷・混合した結果である。即ち、本来は並列していなかった。これはKN校訂本が呈する、改善されるべき問題点の一例に数えられよう。では、これら二つの読みのうち、いずれが「よりよい」、あるいは本来的な読みであろうか？

ācakṣita- の読みは『法華経』「序品」偈文 (Saddhp I 79) や『マハーヴァストゥ』(Mv) 散文 (II 97,11) にも伝わる。用例は極めて少ないながら、『法華経』偈文と散文、さらに『マハーヴァストゥ』に共通の語形成法による語形が存することは興味深い。恐らくカシュガル写本「法師品」が伝える *anācakṣita-pūrvam*- は、より本来的な読みの遺存形であり⁴、偈文と散文との一少なくとも「序品」偈文と「法師品」散文との一形成・成立の年代差がさほど遠からぬことを示唆する。他方、上掲「法師品」の一節についてネパール系写本が一貫して伝える *ākhyāta*- の読みは、後代の改変によるものと考えられる。

この推測の傍証として、*ā-khyā* と *ā-cakṣ* との動詞形の並行調査の結果を挙げることができる（一本文末付録）。

カシュガル本・ギルギット本は *ā-cakṣ* の現在形について、共通して、かつ

3 笠松直「梵文『法華経』諸伝本における *ā-khyā* と *ā-cakṣ* の活用の変遷について」『印度学佛教学研究』第67号第2号（2019年），pp.958(85)-952(91)。

4 勿論、本来ネパール諸伝本が伝えるように *an-ākhyāta*- とあったものを、ある写字生がI章偈文の *ācakṣita*- を参照し、上述の箇所を古語風に仕立て直したという可能性もあり得る。しかし以下に例示するように、そうした改変は基本的には正規のサンスクリットを志向してなされたものと思われる。

一貫して第1類能動相の活用形を伝える (*ācakṣati*, *ācakṣeya* ないし *ācakṣeyāt*, *ācakṣet*)⁵。これは両伝本が共に非サンスクリット的な(ないし中期インド語的な)文法形式を濃厚に遺し、文法上、本質的な類似性を持つことを示唆する。他方ネパール系写本では、第1類・第2類活用が混在する⁶。書写年代が下るにつれ、標準的なサンスクリットで期待される第2類中動相活用 (*ācaṣṭe*, etc.) へ順次移行する傾向は看取できるものの、最後まで一校訂本に至っても⁷一統一されず、混用状況のままである⁸。

要するに、現行の校訂本(または特に新層のネパール系写本群)に見られる『法華経』偈文と散文との文法的差異の少なくとも一部は、紀元後数世紀以内と推定される『法華経』成立時代以来の本来の差異ではなく、その後の写本伝承過程における二次的・三次的改変に係る。改変の度合いはネパール系写本の、特に後代のものに著しい。他方カシュガル写本は、書写年代は比較的新しいものの、ギルギット写本とも共通する古態を、または古態を推定しうる語形をよく遺すと評価すべきである。

以下、同様の論点を示唆する例を示す。

3. *paśyitavya-*, *paśyitvā*, *paśyīṣu*, *a-paśyanā-*

3. 1. *paśyitavya-*

『法華経』受持の功德を示すため、この法門を受持する者は如来の如くに思

5 両伝本ともIV章散文に第1類現在活用の *ācakṣati* を、さらにカシュガル写本はIV章とX章との散文に中期インド語的な希求法語形を伝える (104b6 *ācakṣeyāt*; 215b4-5 *ācakṣeya*)。興味深いことにカシュガル写本はXVIII章(= KN/ WT XVII章)では正規のサンスクリット的な希求法 *ācakṣet* を示し、言語的な断層の存在を示唆する。

6 例えばCambridge蔵本は、IV章では第1類能動相の形を示すが (32b5 *ācakṣet*), XVII章では正統的な第2類中動相の希求法語形 (113a3-4 *ācakṣīta*) を伝える。

一部写本が示すIV(及びX)巻の *ācakṣeyāt*, *ācakṣeya* または *ācakṣet* とXVII/XVIII巻の *ācakṣet* または *ācakṣīta* の読みの違いは、所謂「迹門」と「本門」との差異を反映している可能性がある。なお、ギルギット写本は一貫して *ācakṣet* を用いるので、この問題に寄与しない。

7 IV巻で *ācaṣṭe* (第2類中動相直説法), *ācakṣet* (第1類能動相希求法), 他方X巻及びXVIII巻で *ācakṣīta* (第2類中動相希求法)。

8 即ち、全編に亘って *ā-cakṣ* の活用形を校閲するような編集者は存在しなかったと考えられる。一部に改変の痕跡が看取されるものの、ネパール系写本伝承においても伝承は基本的に、可能な限り保守的に維持されてきたと思しい。

われるべきだと説いて曰く：KN X: 226,1-2 *sa hi Bhaiṣajyarāja kulaputro vā kuladuhitā vā tathāgato veditavyaḥ, sadevakena lokena* 「何故なら彼は、薬王よ、善男子であれ善女人であれ、如来であると知られるべきだからだ、神々のそれを伴う世界によって」(= WT 197,14-15)⁹。この並行箇所、カシュガル写本「法師品」は特徴的な *paśyitavya-* の読みを伝える：

Kashg X: 214a4-6 *tathāgata eva te bhaiṣajyarāja kulaputrā vā kuladuhitaro vā dhārayitavyā 'nāgate ('dhva)bhi paśyitavyā · sadevakena lokena*

他ならぬ如来として、薬王よ、善男子であれ善女人であれ、受持されるべきだ、未来世において見倣されるべきだ、神々のそれを伴う世界によって。

paśyitavya- は「見る」の現在語幹 *paśya-* に基づく gerundive 形と判断される。この語形は、サンスクリットとしては非正規的だが¹⁰、旅順写本の並行箇所にも確証される：旅順 A-8V11 /// *paśyitavyaṃ lo* ///。ではこの読みが本来的なものか、それとも中央アジア系写本特有の二次的改変に過ぎないものであるかが問題となろう。

結論的には、*paśyitavya-* は先の *an-ācakṣita-* と同様、本来的なものであったと考えるべきであろう。現在語幹 *paśya-* に基づく語形は、パーリ文献が示す状況を勘案すれば¹¹、古くはより広範に用いられていたものと考えられる。以下、例示する。

9 ネパール系写本の読みをコルカタ本によって例示する：Kolkata 101a 3-4 *sa hi bhaiṣajyarāja sa kulaputro vā kuladuhitā vā tathāgato veditavyaḥ // sadevake(na) loke(na) samārakena //*

10 「見られるべき」「見倣されるべき」の意味であれば、通常期待される語形は *draṣṭavya-* であろう。例えば KN V: 136,11 *tatra yathā'sau mahā-vaīdya evaṃ tathāgato draṣṭavyaḥ* 「その際、あたかもかの大医師の如く、そのように如来は見倣されるべきである」(= WT 126,21 ≡ Kashg V: 136a2 *tatra yathā'sau vaīdya evaṃ tathāgato drraṣṭavya ·*)。

11 パーリ文献には gerundive 形 *passitabba-* (BHS 対応形 *paśyitavya-*)、gerund 形 *passitvā* (BHS 対応形 *paśyitvā*)、aorist 形 *passi*, *passimsu* (BHS 対応形 *paśyi*, *paśyiṣu*) 等が広範に用いられている。名詞形についても、例えば *vipassanā-* (BHS 対応形 *vipaśyanā-*) を挙げることができる。

3. 2. *paśyitvā*

gerund 形 *paśyitvā* は、『マハーヴァストゥ』の偈文部分にも散文部分にも在証される¹²。古層 BHS 文献では普通の語彙・文法であったと思しい。『法華経』では、偈文中であればギルギット・ネパール系写本にも見出される。古写本の一つ、ギルギット本 A (Watanabe 校訂本69,24-27) で示せば：

*buddhāms ca paśyitvā mahānubhāvāms triṃśac ca pūrṇā nayutāna koṭyaḥ [/
cariṣyate carya tadānulomām imasya jñānasya kṛtena caiṣaḥ // VI 18 //*

そして、大威力ある仏陀たちを見てのち¹³ — [その数は] 那由多の30コーティが満ちる — そしてこの者はそれに相応しい行を行じるであろう、この認識 [を得る] ために (～ KN 149,7-8 ～ WT 135,8-11 ～ Kashg 145a4-6)。問題の箇所は、カシュガル写本も同じ読みを示し (145a4 *paśyitvā*)、諸本一致する。これを本来的な読みと想定することは大方の同意を得られよう。

ところでこの gerund 形 *paśyitvā* は、中央アジア写本では散文中にも見られる。例 え ば : Kashg VII: 182b1-2 ... *tam ṛddhimayaṃ nagaraṃ paśyitvā praviśeyur* 「[人々が] その神通力でできた都城を見てのち、入るとしよう」¹⁴。

さらに旅順写本が第 XI 章「宝塔品」散文部分に 1 例、*paśyitvā* の用例を残す：旅順 B-11R8 *taṃ mahāratanasthūpaṃ paśyitvā* ... 「かの大宝塔を見てのち…」。

興味深いことに、この箇所のカシュガル写本並行部分は KN 及び WT と同様の普通のサンスクリット語形 *dr̥ṣṭvā* を示す：Kashg XI: 228a1 *taṃ mahāttaṃ*

12 管見の限り、用例数は *paśyitva* (4 例) と *paśyitvā* (27 例) とを併せて 31 例。うち 19 例は偈文に偏る：II 40,13; 307,8; 353,11; 354,17. 19; 355,4. 12; 359,4; 363,8; 367,17; 370,17; 376,10 (**tva*); 390,15 (**tva*); III 277,14; 279,1. 3. 9. 17; III 83,17 (**tva*)。従って散文での用例は 12 例：I 302,10; 363,20; 364,3. 10; II 273,5; 275,17; 311,14; 480,2; III 10,12; 132,14; 285,19 (**tva*); 296,6。

但し標準サンスクリット的な *dr̥ṣṭvā* の用例のほうが圧倒的に多く、また偈文・散文に普遍的である。

13 Cambridge 蔵本 47a3 *paśyitva* : 大英図書館蔵本 60b2, コルカタ本 66b5, 東大蔵本 39a *paśyitva*。

14 ギルギット写本 (A: 91,31) の読みは：... *tam ṛddhimayaṃ nagaraṃ praviśeyuḥ*。校訂本対応箇所は：KN VII: 188,6-7 ... *tad ṛddhimayaṃ nagaraṃ praviśeyur* (= WT 166,23-24)。カシュガル写本の *paśyitvā* の読みは孤立的で、非本来的な、後の竄入とも見做し得る。但し「見てのち」の意味の gerund に、通常の語形 (*dr̥ṣṭvā*) ではなく *paśyitvā* を一たとえ古語形と意識した上でであっても一用いることができた段階で入ったものと思われる。

ratnastūpaṃ dṛṣṭvā ... 「かの大なる宝塔を見てのち…」 (~ KN XI: 240,5 = WT 207,18f. ... *taṃ mahāntaṃ ratnastūpaṃ dṛṣṭvā ...* 「かの大なる宝塔を見てのち…」)。

旅順・カシュガル両伝本の読みの違いは、両者が別個の伝承に属することを示唆するものかもしれない。しかし上述の *ā-cakṣ* の活用形の遷移の状況を想起すれば、筆写時期がより新しいカシュガル写本が古典サンスクリット語化をより強く被ったことによる、とも解し得る。旅順写本の写字生は、『マハーヴァストゥ』写本のそれと同様、散文中に *paśyivā* が現れても訂正する必要を認めなかったものであろう。カシュガル写本の書写時代までの何れかの段階の写字生が、散文中の *paśyivā* を異例と見て、いわば「校正」するに至ったものかと考えられる。

3. 3. *paśyīṣu*

Saddhp では他に、*paśya-* 語幹に基づくアオリスト語形も数例見ることができる。Saddhp I 48 *paśyīṣu*¹⁵ 及び VII 87 *paśyīṣu* (Kashg 187a2 *paśyīṣu*)¹⁶ である。校訂本の読みを代表として挙げる：

*ahaṃś v'imāś ca bahu-prāṇa-koṭyo iha sthītāḥ paśyīṣu sarvaṃ etat /
prapuṣṭitaṃ lokam imaṃ sadevakaṃ jinena muktā iyaṃ ekaśaṃś // I 48 //*

私は、そしてこれら沢山の幾コーティの生命たちは、この世にいながらにしてこの全てを見た。この、花咲きこぼれる、神々のそれを含む世界を。勝利者によって、この一本の光線が解き放たれた (KN 15, 5-6 ~ WT 13,18-21 ~ Kashg 21b2-4)。

*tasyo jinasya parinirvṛtasya caritva te paśyīṣu buddhakoṭyaḥ /
teḥ tadā śrāvitakeḥi sārddhaṃ kurvanti pūjāṃ dvipadottamānām // VII 87 //*

かの、完全に涅槃した勝利者の〔教法において、修業を〕行じてのち、彼らは幾コーティの仏陀たちを見た。その時、彼らは、かの〔法を〕説き

15 Gilgit A: 11,19は *addaśi* と読み、カシュガル写本やネパール系写本が伝える *paś* に基づく読みの一群に対して孤立的である。Cambridge 蔵本6a1 *paśyīṣu*；大英図書館蔵本7a5及びコルカタ本7a3 *paśyīṣu* までアオリスト形の伝承が残存している。東大蔵本 (4b4 *paśyati*) の読みは後代の改変形と見るべきと思われる。

16 Gilgit A: 95,28 *paśyīṣu*, Cambridge 蔵本63b5 *paśyīṣu*；大英図書館蔵本79b3及びコルカタ本88a4 *paścīma*；東大蔵本50b8 *paśyīma*。前注に見られた状況とは異なり、新層の写本では読みが崩れていると評価すべきものと思われる。

聞かされた者たちと共に、二足の者の最上位者たちへの供養を為す」(KN 194,7-8 ~ WT 171,23-26 ~ Kashg 187a1-3)。

この語形は、さらに下って第 X V 章韻文部分にも存する：Saddhp XV 4 *paśyīṣū*¹⁷; XV 14 *paśyīṣu*¹⁸。二箇所ともカシュガル写本の対応は欠落するが、各写本の読みの支持がある。

3. 4. *a-paśyanā-*

特異な名詞 *a-paśyanā-* が第 V 章「藥草喩品」散文に見られる：

KN V: 137,12-13 *ya evaṃ gambhīrān dharmān paśyati sa paśyaty apaśyanayā sarvatraidhātukaṃ paripūrṇaṃ anyonyasattvāśayādhimuktam //*

凡そこのように深淵なる諸法を見る者があれば、彼は、見ないという仕方でもって見るのである：三界に属するもの全ては、個々の衆生の意向・志向に満ちている、と (= WT 127,11-12)¹⁹。

現在語幹 *paśya-* を *ana-* 接辞で名詞化することは、例えば Pāli *vipassanā-* (BHS *vipaśyanā-*) にも通じており、中期インド語的ないし仏教混交梵語的と評価できよう。カシュガル写本では、*ana-* で作った名詞に接辞 *-tā-* を付した語形が見られる：Kashg 137a2 *ya evaṃ gambhīrān dharmān paśyaty apaśyanatayā*・「凡そこのように深淵なる諸法を〔見る者が〕あれば、彼は見ないという仕方であることを以て見るのである」。

このようなテクニカルタームは、いったん成立すれば人口に膾炙して定着し、変更はままならないものであろう。そうした語形は、その語形または概念が形成された時期の文法のありようを化石的に遺すこととなる²⁰。

本節にて論及した語形を出典順に並べれば以下の通り：Saddhp I 48^m

17 Gilgit A: 116,2 *paśyīṣū* ; Cambridge 蔵本106b1 *paśyīṣū* ; コルカタ本145a6, 東大蔵本82b8 *paśyīṣū*。大英図書館蔵本は欠。

18 Gilgit A: 117,9, コルカタ本146a1, 東大蔵本83a4 *paśyīṣu* ; Cambridge 蔵本107a1 *paśyīṣu*。大英図書館蔵本は欠。

19 Gilgit A: 64,18 *apaśyanayā* をはじめ、ネパール系写本も同様：大英図書館蔵本57a2, 東大蔵本36b6 *apaśyanayā*, Cambridge 蔵本44b3 *apaśyanayā* ; 但しコルカタ本62b5 *ayamasyanayā* [sic.] には、やや伝承に混乱が見られる模様である。

20 カシュガル写本がバーリ語形にも通じる *samādapana-*, *samādapaka-* の読みを残すことはその一例と考えられる。これらが単なる誤記でないことは動詞形 *samādapeti*, *samādapayati* etc. が保障する。

paśyiṣu ; V: KN 137,12^p *apaśyanā-* (~ Kashg 137a2^p *apaśyanatā-*) ; VI 18^m *paśyitva* ; Kashg VII: 182b2^p *paśyitvā* ; VII 87^m *paśyiṣu* ; Kashg X: 214a6^p *paśyitavyā* (~ 旅順 X: A-8V11^p *paśyitavyam*) さらに第 XI 章「宝塔品」相当箇所、旅順 B-11R8^p *paśyitvā*。加えて XV4^m *paśyiṣū*, XV14^m *paśyiṣu*。これらの諸語形の存在は、これら諸章の形成期に *paśya-* 語幹が複数の語形を派生させる生産的な語幹であったことを示唆する。²¹

4. 小結

上に論じたように、諸伝本に見られる異例形群はしばしば孤立的ではなく、それらを派生させる一貫した文法規則に基づく。従って一群の語形は纏めて論じられるべき必要がある。

時に写字生は、自己の「正しい」サンスクリットの知識に確信があり、疑いなく誤用であると判断した場合に異例語形を「正しく」書き直したものと思しい。その改変の度合いは、韻律の制約のない散文でより強かったであろう。そうした写本伝承過程を繰返し経て、我々が手に取る多くの—ネパール系の—写本の、特に散文テキストは、比較的にせよ「正しい」サンスクリットで均された後の姿を示すことになる。

しかし本稿が検討したように、保守的に伝承された写本の読み、あるいは写字生の「校訂」の手を逃れた語形に徴すれば、それらは偈文にも散文にも一貫した文法が存在したことを推定せしめる。『法華経』内部の層序関係については、こうしたサンスクリット原典が示唆する情報を加味して再考すべき余地があるだろう。

この際、最古の旅順写本の情報を重視すべきことは当然であるが、残存テキスト量の多寡と伝承の保守性の観点からギルギット写本及びカシュガル写本とが特に注目されるべきものとする。カシュガル写本散文には後代の付加と思しい例が見られるものの、この写本が呈する上に論じたような語形の多様さは、編集に際しての事情を推知せしめる可能性がある。

5. *veditavya-* と *vedayitavya-*

21 この他、孤立的ながら陀羅尼の章句 (*dhāraṇīpada-*) の一部に *buddhapaśyane* が存する (KN XXVI: 477,2 = WT 387,8 = Kashg XXVII: 450a4)。

上述の諸点は、I 章「序品」から X 章「法師品」または XI 章「宝塔品」までに見られる特異な語形の派生法、すなわち文法に一貫性が看取されること、従ってこれら諸章が同一の、または極めて近接した言語層に属することを示唆するが、カシュガル写本「法師品」以降に見られる *vedayitavya-* はその反例たりえる。事例に徴しつつ問題点を確認する：

KN X: 225, 3 *sattvānām anukampārtham asmiñ Jambudvīpe manuṣyeṣu pratyājātā veditavyāḥ* /

〔彼らは〕衆生たちへの同情のために、この閻浮提で、人間たちの間に生まれてきた者たちと知られるべきである (= WT 196,19f.)。

ここに見るように、動詞 *vid* の gerundive は *veditavya-* が標準的である。カシュガル写本にもこの語形は確認できる。例えば Kashg II: 51a2 *tad anenāpi te śāradvatīputra paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ* 「そこでこの方法によっても、君には、Śāradvatīputra よ、このように知られるべきである」(～ KN II: 43,2 *tad anenāpi te śāriputra paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ* = WT II: 39,26-27) を始めとし、第 VII 章に至るまで一貫して *veditavya-* が用いられる²²。

他方、例えば上掲 KN X: 225, 3 に対するカシュガル写本の並行は、*-aya-* で拡張された *vedayitavya-* を用いる²³：

Kashg X: 213a 1-2 *sattvānām te bhaisajyarāja kulaputrā vā kuladuhitaro vā anukampārtham imasmi(ṃ) jambudvīpe manuṣyeṣūpapaṇṇā vedayitavyā*・

衆生たちへの同情のために、彼らは、薬王よ、善男子たちであれ、善女人たちであれ、この閻浮提で、人間たちの間に出生した者たちと知らしめ

22 出典箇所は：II: 51a2 *veditavyaṃ*；51b5-6 *veditavyāḥ*；51b6 *veditavyāḥ*；51b6 *veditavyāḥ*；III: 89b7 *veditavyaṃ*；VII: 180b3 *veditavyaṃ*，以上6例。なお第 X 章以降にも孤立的に二例存する (X: 220b4 *veditavyāḥ*；XXVII: 452b4 *veditavyaṃ*)。これらを含めれば計 8 例。

23 出典箇所については、既に戸田「西域出土梵文法華經研究覚書 (五)」pp.66-67 が纏めて列挙している。戸田に従いつつ出典箇所を挙げる：X: 213a2 *vedayitavyāḥ*；215a1 *vedayitavyo*；215a2 *ve(da)yitavyaṃ*；215a7 *vedayitavyaṃ* (2x)；216a4-5 *vedayitavyaṃ*；219a7 *vedayitavyāḥ*；XVII: 324a3 *vedayitavyaṃ*；326b6 *vedayitavyāḥ*；328a6 *vedayitavyo*；XXI: 378b2 *vedayitavyas*；378b3 *vedayitavya(ṃ)*；378b4-5 *vedayitavyaṃ*；378b5 *(veda)yitavyaṃ*；XXIII: 402a4 *vedayita(vyaḥ)*；XXVII: 450b1 *vedayitavyaṃ*；453a3 *vedayitavyaḥ*；453a4 *vedayitavyā*；453b3 *vedayitavyāḥ*；455b1 *vedayitavyaṃ*，以上、第 X 章以降 20 例を数える。

られるべきである。

カシュガル写本は第 X 章以降、ほぼ全面的に *vedayitavya-* と読む²⁴。これは文法的には使役形の *gerundive* と解し得る。それ故、異例な語形とは言えないものの、カシュガル本第 II 章から第 VII 章までが一貫して *veditavya-* と読むことに対し特徴的である。用例の遍在にも注意すべきであろう。*veditavya-* ないし *vedayitavya-* の用例は第 X 章に集中して現れ、以降の諸章に多数確認される²⁵。この前後で単語の選好・文体に些か変化が生じた証左と思しい²⁶。

これらの点を勘案すれば、第 X 章以前・以後に断層の存在を想定することは一定の合理性を持つものと思われる。

略号

BHS : Buddhist Hybrid Sanskrit **Kashg** : Saddhp の Kashgar 写本 **KN** : ケルン・南條校訂版 Saddhp ^m : 韻文部分 **Mv** : Mahāvastu ^P : 散文部分 **Saddhp** : Sanskrit text of *Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra* **WT** : 荻原・土田校訂版 Saddhp

参考文献

EDGERTON, Franklin. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2 vols. New Haven: Yale University Press, 1953

24 他に例えば：KN X: 227,7-8 *tat kasya hetoh / tathāgatābharāṇa-pratimaṇḍitaḥ sa bhaṣajyarāja kulaputro vā kuladuhitā vā veditavyaḥ* / 「それは何の故であるか。彼は如来の資具（装身具 *ābharāṇa-*）で飾り付けられた者であると、薬王よ、善男子であれ善女人であれ、知られるべきである（= WT 198,13-14）」とその並行 Kashg X: 216a3-5 *tat kasya hetos. tathāgatābharāṇapratimaṇḍita bhaṣajyarāja sa kulaputro vā kuladuhitā vā vedayitavyam*・とは、ほぼ完全に同一文でありながら、*veditavya-* ⇔ *vedayitavya-* の箇所のみ読みを違える。

25 索引によれば、(KN/) WT には *veditavya-* の用例は計32例存する。その分布は：II 章に 3 例、III 章に 1 例、VII 章に 1 例。一方で X 章に11例が集中し、以下 XVI 章に 4 例、XIX 章に 1 例、XX 章に 3 例、XXII 章に 2 例、XXVI 章に 6 例とあり、X 章の用例数の突出と後半部分での用例が目立つ。

26 管見の限り、「スコイエン・コレクション」にある *Śikhālakhasūtra* は一貫して *vedayitavya-* を取る (Jens-Uwe Hartmann and Klaus Wille, *A Version of the Śikhālakhasūtra/Siṅgālovādasutta*)。この他、有部系とみられる *Nidānaṣaṇṭyukta* や一部大乘経典 *Ratnaḡaṇa-saṃcayagāthā* 等にも用例が散見される (河崎豊氏の教示による)。

- Gorō, Toshifumi. *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background in co-operation with Jared S. Klein and Velizar Sadovski*. Wien: Verlag der Österreichische Akademie der Wissenschaften, 2013.
- HARTMANN, Jens-Uwe and WILLE, Klaus. *A Version of the Śikhālakhasūtra/Singālovādasutta*. Manuscripts in the Schøyen Collection III. Oslo: Hermes Publishing, 2002, pp.1 – 6
- 石田智宏「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」『身延山大学東洋文化研究所所報』第10号, 2006年, pp. 1 – 28
- 伊藤瑞毅 et al.『梵文法華經荻原・土田本総索引』東京: 勉誠社, 1993年
- 辛嶋静志「法華經の文献学的研究」『印度学佛教学研究』第45巻第2号, 1997年, pp. 918(125) – 914(129)
- 笠松直「samādapana- と samādāpana—『法華經』カシュガル写本再考に向けて—」『三友健容先生古稀記念論集』2016年, pp.434(529) – 421(542)
- KASAMATSU, Sunao. *On the Derivation of samādapana-/samādāpana- in the Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*『印度学仏教学研究』第64巻第3号, 2016年, pp.1164(122) – 1170(128)
- 笠松直「梵文『法華經』諸伝本における ā-khyā と ā-caṣ の活用の変遷について」『印度学佛教学研究』第67号第2号, 2019年, pp.958(85) – 952(91)
- KERN, H. and NANJIO, B. *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica X. St. Petersburg 1908 – 12
- KOTSUKI, Haruaki. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No. 414). Romanized Text*. Soka Gakkai, 2003
- KOTSUKI, Haruaki. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add. 1684). Romanized Text*. Soka Gakkai, 2010
- KOTSUKI, Haruaki. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Asiatic Society, Kolkata (No. 4079) Romanized Text*. Soka Gakkai, 2014
- MIZUFUNE, Noriyoshi. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204). Romanized Text*. Soka Gakkai, 2011
- SENART, Émile. *Le Mahāvastu. Texte sanscrit publié la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*. 3 vols. Tokyo: Meicho-Fukyu-kai, 1997
- 戸田宏文「西域出土梵文法華經研究覚書 (五)」『徳島大学教養部紀要 (人文・

- 社会科学)』第九卷, 1974年, pp.21-74
- TODA, Hirohumi. *Saddharmapuṇḍarikasūtra. Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Tokushima 1981
- WOGIHARA, U. and TSUCHIDA, C.『改訂梵文法華經』山喜房仏書林, 1934年
- ZHONGXIN, Jiang.『旅順博物館所藏梵文法華經断簡 写真版及びローマ字版』旅順博物館・創価学会, 1997年

ā-khyā 語形表

No	Kashgar (CA)	KN [WT]	Gilgit	Cambridge 本	大英図書館本	Kolkata 本	東大蔵本
①	40b5 ākhyātā	II: 33,10 [32,15] ^p ākhyātā	A: 22, 29 ākhyātā B: 185,20 ākhyātā	10b6 ākhyātā	15a2 ākhyā(tā)	15b7 ākhyātā	10b1 ākhyātā
②	76a3 (deśitām)	III: 71,6-7 [69,5] ^p ākhyātām	B: 209,13 ākhyāta[m]	22b6 ākhyātām	30b6 ākhyātām	33a2 ākhyātām	20a5 ākhyāta(m)
③	124a4 ākhyātā	V: 123,5 [115,20] ^p ākhyātā	A:56,7-8 ākhyātā	39a3 ākhyātā	51a4 āvyetā (sic.)	56a5 ākhyātā	33a5 ākhyātā
④	189a2 ākhyāmi	VII 105: 198,2 [174,20] ^m ākhyāmi	A: 98,4 ākhyāmi	64b3 ākhyāmi	80b1-2 ākhyāmi	89a5 ākhyāmi	51b1 ākhyāmi
⑤	(対応語欠)	VIII: 200,5 [177,1] ^p ākhyātā	A: 99,18 ākhyātā	65a5 ākhyātā	81a5 ākhyātā	90a3 ākhyātā	52a2 ākhyātā
⑥	(→ anācakṣitam)	X: 230,8 [201,1] ^p anākhātām	(omission)	74b3 anākhātām	92b1 anākhātā- pūrvva-nimittam	103a5 anākhā(ta)- pūrvam	59a7 anākhātāpūrvam
⑦	222a7 vyākhyātām	X: 233,12 [202,26] ^p ākhyātām	(omission)	(omission)	93b3 ākhyātām	104b4 ākhyāta(m)	60a3 ākhāte (sic.)
⑧	247a3 ākhyāsyati	XI: 257,4 [220,14] ^p ākhyāsyati	B 240,13-14 ākhyāsyati	82b2 ākhyāsyati	102b5-6 ākhyāsyati	115a3 ākhyāsyati	66a3 ākhyāsyati
⑨	291b6 ākhyāhi	XIV 5: 303,4 [257,28] ^m ākhyāhi	A: 103,25 ākhyāhi	98a5 ākhyāhi	119b6 ākhyāhi	135b2 ākhyāhi	77b4 ākhyāhi
⑩	293b5 ākhyāhi	XIV 28: 306,10 [260,1] ^m ākhyāhi	A: 105,6 ākhyāhi	99a3 ākhyāhi	120b3 (ā)khyāhi	136b1 ākhyāhi	78a4 ākhyāhi
⑪	294a1 ākhyāhi (Lū A - 1 2 V 1 0 ā(khyāhi))	XIV 30: 306,14 [260,5] ^m ākhyāhi	A: 105,10 ākhyāhi	99a4 ākhyāhi	120b4 ākhyāhi	136b3 ākhyāhi	78a5 ākhyāhi
⑫	402a6 °-m-ākhyā //	XXII: 417,3 [348,4] ^p ākhyāyate	A: 166,23 ākhyāyate	136b1 ākhyāyate	151a5 ākhyāyate	186b6 ākhyāyate	104b5 ākhyāyate
⑬	(omission)	XXII: 417,4 [348,7] ^p ākhyāyate	A: 166,23 ākhyāyate	136b1 ākhyāyate	151a5 ākhyāyate	186b7 ākhyāyate	104b6 ākhyāyate

ā-cakṣ 語形表

No.	Kashgar (CA)	KN [WT]	Gilgit	Cambridge 本	大英図書館本	Kolkata 本	東大蔵本
①	33a6 ācakṣito	I 79: 25,13 [23,26] ^m ācakṣito	A 17,15 ācakṣito	9b3 ācakṣito	12a2 ācakṣito	12b2 ācakṣito	8b3 ācakṣito
②	104b6 ācakṣeyāt	IV: 102,9 [97,3] ^p ācakṣet	B 225,14 ācakṣet	32b5 ācakṣet	43a3-4 ācakṣit	47a4-5 ācakṣīta	28a3 ācakṣet
③	107b4 ācakṣati	IV: 105,3 [99,1] ^p ācakṣet	A 45,16 ācakṣet B 226,27 ācakṣet	(omission)	44a6 ācakṣīta	48b3 ācakṣīta	28b8 ācakṣe mama°.
④	113a ācakṣati	IV: 109,7 [102,10] ^p ācaṣṭe	A 47,1-2 nācakṣati = B 229,13	(omission)	46b2 bhāṣṭe (sic.)	51a2 āceṣṭe	30a6 ācaṣṭe
⑤	133b6 acakṣutvāt	V: 134,9 [125,2] ^p ācakṣamāṇānām	A 62,29 ācakṣatām	43a5 ācakṣayantām	55b2 ācakṣamāṇānām	61a2 acakṣatām	35b7 ācakṣamāṇānām
⑥	215b4-5 ācakṣeya	X: 227,3 [198,7] ^p ācakṣīta	(omission)	73b3 ācakṣe	91a3 ācakṣit	101b4 ācakṣīta	58b2 ācakṣit[r]a
⑦	219a4 anācakṣita-pūrvam	X: 230,8 [201,1] ^p anācakṣita-pūrvam	(omission)	→ ā-khyā			
⑧	332a1 (欠)	XVII: 345,12 [292,17] ^p ācakṣīta	A 128,13 mahyācakṣet (*sainvasyācakṣet)	113a3 ācakṣīta	(omission)	154a5 ācakṣit	87b7 ācakṣet
⑨	332a3 (欠)	XVII: 346,2 [292,19f.] ^p ācakṣīta	A 128,15 ācakṣet B 260,11 ācakṣet	113a4 ācakṣīta	(omission)	154a6 ācakṣit	87b7 ācakṣet
⑩	332a3-4 ācakṣet	XVII: 346,3 [292,21] ^p ācakṣīta	A 128,16 ācakṣet	113a4 ācakṣīta	(omission)	154a6 ācakṣeta	87b7 ācakṣet
⑪ ↓ ⑮	332a6(2x), 332a7, 332b1(2x) ācakṣet						

※太字は第2類活用（を示唆する）箇所

Some notes on *anācakṣita*, *paśyitavya*- and *vedayitavya*- in Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra X

Sunao KASAMATSU

This paper is intended as an investigation of the philological value of selected words attested in the tenth chapter of the Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra.

KN X: 230, 8 *anācakṣitapūrvam anākhyātam* is a mixture of the Kashgar recension's *anācakṣita*- and the Nepalese *anākhyāta*-. These two verbs, *ā-cakṣ* and *ā-khyā*, show a suppletive paradigm. The regular past participle is derived from *ā-khyā* (*ākhyāta*-), but we can find *ā-cakṣita*- in Saddhp I 79, attested in all manuscripts. Most of the other examples can be explained as follows:

In the original "Lotus Sutra", *ā-cakṣ* was conjugated based on the thematic stem as the Kashgar manuscript and the Gilgit recension show. For example, we can find the optatives *ācakṣeyāt* (Kashgar IV) or *ācakṣeya* (Kashgar X) in the prose portion of Kashgar X. On the other hand, KN VII: 109, 7 (=T8 30a6) *ācaṣṭe* might be a secondary reading modified by later scribes (cf. Kashgar, Gilgit A, B *ācakṣati*).

As for Kashgar X *paśyitavya*- we can point out a number of derivatives of the stem *paśya*- as follows: Saddhp I 48^m *paśyiṣu*; V: KN 137,12^p *apaśyanā*- (~ Kashg 137a2^p *apaśyanatā*-); VI 18^m *paśyitva*; Kashg VII: 182b2^p *paśyitvā*; VII 87^m *paśyiṣu*; Kashg X: 214a6^p *paśyitavyā* (~ Lüshun A-8V11^p *paśyitavyam*), Lüshun XI: B-11R8^p *paśyitvā*, XV4^m *paśyiṣū* and XV14^m *paśyiṣu*.

These forms mentioned above reveal that these chapters are linguistically close to each other. But the readings *veditavya*- (Kashg II-VII) and *vedayitavya*- (Kashg X-XXVII) suggest there is some difference between them.